

第3回文化芸術によるまちづくり座談会 議事要旨

日時	2014年12月24日(水) 午後1時～4時
場所	町田市役所2階 市民協働おうえんルーム
出席者	座長 市川宏雄氏(町田市未来づくり研究所所長、明治大学教授)
	委員 伊藤せい子氏(江戸川区総合文化センター館長、サントリー・パブリシティ・サービス株式会社)
	委員 片山泰輔氏(静岡文化芸術大学教授)
	委員 美山良夫氏(慶應義塾大学教授)
	町田市長 石阪丈一
	町田市副市長 高橋豊
	町田市副市長 有金浩一

資料 第3回文化芸術によるまちづくり座談会(スライド)

議事

1. 議題:町田市における文化芸術資源

事務局が、資料を用いて町田市における文化芸術資源を「する・魅せる」「育つ・育てる」「観る・聴く」という3つに分類して紹介し、委員による意見交換を行った。

委員:様々な活動が活発になされているのは、町田市が、まちとして豊かになったことからだと思う。ただ、文化芸術によって豊かなまちをつくるという今回のテーマでは、産業活動として文化芸術活動を行うという「働く・稼ぐ」という観点が欠けている。人口減少の時代のなかで町田が求心力をもつためには、オリジナリティのある創造活動がなされ、町田にしかないものがつくられることが大事ではないか。そのためにはプロの創造の場になる必要がある。

委員:余暇やボランティアなどの活動とは異なる、新しいビジネスの創出に対する視点も必要だと思う。コンペティションのように、若手が成長して世界に羽ばたいていくことはよいことだが、全国から参加者を募ることや運営、組織などを考慮すると、長いスパンで考えなければ発展しにくいのではないかと。

委員:市民による文化芸術活動が多岐に渡って活発に行われているのは全国的にもめずらしいと思う。この状況に行政が支援し、広めていくことはチャレンジだと思うが、そのためには「町田らしさ」を掘り下げる必要がある。町田は古くからの街道の交差点であることから興行・エンターテインメントが産業として根づいていた。地理的条件から文化を語るのは「文化の地政」と、過去にさかのぼる「文化の地層」の両面において、歴史を踏まえた検討が必要だ。

有金副市長:市民活動と町田らしさを全国に発信することが結びつくかどうかを検討する必要がある。可能性のある団体があれば、新しいホールも活動拠点として活用してもらいたいと思う。また、産業振興という観点からも活動の支援については考えたい。

高橋副市長:様々な文化芸術活動と行政がどのようにつながるのかを考えないといけない。

市民活動を含めた基礎がないと、新しいホールは表面的なものになってしまうので、町田に根づくためにも地層を見極める必要があると感じた。

石阪市長:文化芸術振興というときの主語は行政だが、町田市では文化芸術分野での行政の役割を明確にしてこなかった。それを改めないと支援のあり方も、予算のかけ方も答えが出ない。オンリーワンのホールを目指して行政がすべきことを考えたい。

委員:これまでの議論のなかで、既存の文化芸術活動が新しいホールによってどう変わるのかという論点があった。その点では、文化芸術には3つほどの段階があるが、既存の活動は3段階目にはなっていないので、活動のグレードと新しいホールの整合性を考えることが必要だろう。

ほかに東京の郊外における拠点性も話題になったが、ホールをつくることで拠点性を高め、都市を生き残らせることができるのかが問題だろう。その際には、ハードだけでなくソフトも大事になるのだが、それが何かを考える必要がある。

しかし、新しいことをやろうとしているのに、「振興」という古い言葉はふさわしくないのではないか。イノベーションのような新しい言葉を使ってはどうか。

委員:「働く・稼ぐ」という観点では、職業としての芸術家がどれだけ住んでいるかが指標になる。いまも都心のベッドタウンとして住んでいると思うが、さらに町田で働けるようにすると拠点性が高まるだろう。芸術家が住むことは、学校などで子どもがプロの芸術家に触れられるというメリットもある。

2. 議題:新しい文化芸術ホールの考え方～創造・集合・発信～

事務局が、資料を用いて「創造」「集合」「発信」というキーワードで新しいホールの考え方を説明し、想定される事業案を発表した後、委員による意見交換を行った。

委員:交響楽団とフランチャイズ契約を結び、練習場を提供しているホールは「創造」に分類してもよいのではないか。創造的かどうかは、創造する主体が滞在する時間で判断する方がよい。

委員:オーケストラ・アンサンブル金沢のように、地元で活動する団体を全国展開できるまでに育てる考え方もあるのではないか。何にせよ時間をかけた支援が必要だろう。アイデンティティ形成にはさらに時間がかかる。

委員:具体的な事業提案があったが、ホールに限定して考えるのではなく、何が大事なのかを考えた上で、関連領域への影響も含めて議論すべきだ。限られた範囲でのおもしろさではなく、多領域に効果のある事業を考えていく必要があるのではないか。

委員:必要性やアウトカムで考えていくということか。市民ニーズに依拠しながらも、市民に気づきを提供するものであることも重要だろう。町田市にどのような影響を与えるのか、象徴とは何かを考えるべきだろう。

委員:いまは町田市は豊かだが、今後は人口も減少し、財政状況も維持できなくなるかもしれない。そうすると活発な市民活動を支援できなくなる可能性もある。その可能性を考慮し、新しいホールの建設にあたっては、町田にしかないオンリーワンをつくる

ために、現在の文化資源や過去を踏まえた戦略を模索する必要がある。

委員：「創造」という言葉づかいには違和感を覚える。作品が目的ではなく、より深い価値を生み出すことが目的であるはずだ。この目的をもっているからこそ、文化活動は公共性もち得る。そのような文化活動のエンジンとしての装置が文化施設であるべきだろう。そのための理念をもたなければならない。また、創造には破壊的な側面もあり、そのためにも理念が必要となる。

委員：「創造」は経済的な利益が保証されるわけではないが、クリエイティブシティでは、創造的な人材が刺激を求めて都市に集うこと、創造的な活動がビジネスなどの他の領域に影響を及ぼすことを効果として考えている。創造的な人材は刺激し合える場を求めているので、町田市がそのような場をもてるかどうかだろう。そのためには常識外れのことをやることも必要だが、そのときに大切なのは前例のないことを受け入れる寛容性である。その点では、創造性と寛容性のある大学が多いことは町田市の利点だろう。

委員：文化芸術の都市機能における位置付けに関する議論だと思う。新しいことを行うには、競合を分析して弱みを把握し、それを挽回する策を考えなければならない。お金はかかるが、将来的な見返りという前提があるからできる。まちづくりが前提となるとすれば、より魅力的なまちにして、産業を増やすためのホールを考えるべきだろう。

委員：一流の芸術資源を集めようとするならば資金調達について考えなければならない。芸術には時間もかかるが、資金も必要なので、公的財源を投入するなら目的やコストは明確にしなければいけない。

有金副市長：前例から考える行政の限界を感じた。これまでにない新しいことをしなければならぬと感じた。選抜した市民団体を支援し、町田発の団体として育てることもありえるのではないかと思う。ソフトを高めるようなハードをつくる必要があるのだろう。

高橋副市長：何を伝えるのかを考えないといけない。新しいホールが新しい活動を生み出す必要があるのだろう。さらに、ホールだけではなく、まちの資源を活用し、郊外として生き残っていくための価値をつくらぬといけない。ただし、コストが問題になるので、間接投資の可能性も考えたい。

石阪市長：前例のないことを行政がやることは難しいが、リスクを負って新しいことをやらなければならないと感じている。郊外における拠点性を失えば、まちとして埋没してしまう。創造のプロセスがある拠点として町田となっていくために、ホールを含めて、行政が取り組む必要がある。

委員：ホールができることによって町田が生まれ変わるような、そういう意識をもったものであることを市民にも理解してもらうことが必要だろう。

委員：町田の地政について話したが、文化芸術活動の地政という観点もある。都心と町田の距離感を考えると、都心と地方の両方のよさを同時に享受できるのが町田ではないか。そのメリットを活かすことで町田の位置取りが見えるだろう。

以上